

語釈：インターネット Twitter 上でみる Trump 米大統領の英語 (2) (A Basic Way of Reading Trump-Language)

後 藤 寛

心理学の一分野に文章心理学(psychology of writing)があるが、Trump 米大統領の言説はまさに英語の文章心理学的な観点からも興味深いと考える。関連し、言語心理学(linguistic psychology)・心理言語学(psychological linguistics)の面から説く文献に、C.K. Ogden 編集の *Psyche* 全 18 巻があり、Basic 研究上で貴重なものである。

Trump 米大統領の英語はまさに日常的なアメリカ語で、彼の心理もよく読み取れるスタイルのものである。もちろん Basic 的な表現もあるが near-Basic はどこにでもある。Basic は英語の心・魂であるがゆえ、あらゆる英文にその Basic 的な側面は自然と現れるわけであるが、near-Basic は Basic ではない。Basic の methodology (方法論)としての適用範囲は広い。本連載ではその適用範囲の広がり意識下においている。

就任以来 500 日を越えた Trump 大統領であるが、今回扱う文例中にも、やはりストレートに物を言う彼らしさが出ている。以下、word (語) と wording (文言) に注目し「語釈」を試みる〔太線・複線・単線は筆者、文末の括弧内の日付は現地時間〕。

- ① California finally deserves a great Governor, one who understands boarders, crime and lowering taxes. John Cox is the man – he'll be the best Governor you've ever had. I fully endorse John Cox for Governor and look forward to working with him to Make California Great Again! (May 18, 2018)

▲引き合いに出す例には限りがないが、前回も触れた感嘆符付きの Trump 大統領が決め言葉の 1 つとしてよく用いる文例を提示した。ここでは文末の下線部で make の後ろで America ではなく California としている。内容はカリフォルニア州知事選に立候補する John Cox がメキシコなどとの国境の壁、犯罪、税金問題に理解を示す点でも適任者であると高く評している Trump 大統領の英語である。

カリフォルニアとメキシコの国境あたりに関しては筆者も米国の大学院留学中に思い出がある。国境を越えた南に Tijuana というメキシコ領の町がある。そこはもう英語ではなくスペイン語の地で、まったく別世界である〔ついでながら、スペイン人にとっての América とはメキシコなど祖国の中南米(Central and South America)のことであり、北米(United States of America: U.S.A)のことではない〕。

当時もメキシコ側からカリフォルニア側へ入るときの検問は厳重であった。メキシコと米国の国境を流れる川が西部劇映画『リオ・グランデの砦』でも知られるスペイン語名の Río Grande (= Great River) 川であるが、ここを泳いで違法入国する者たちのことを英語で wetbacks と言う。

太線の語 deserve はきわめて英語的なもので、頻出する。「役立って賞賛に値する」の意味であるが、これは Basic 語 **servant** と同系(paronymic)の関係にある。プラスα Basic 語では service、さらにやはりプラスα Basic 語 **desert** (砂漠)とも同系である。desert は「役立たなく見捨てられた土地」のことである。さらにまたこの desert は、実は un-Basic 語 dessert (デザート)とも同系である。「デザート」は service 上での最後のもので、もうあとには料理はなく、「サービスは役立たず、見捨てる」という意味をもっている〔このあたりはやはり拙著(2016)「松柏社」、第三部 p.207 で触れて

いて、Basic 語を軸に既知の語をよりどころとすれば大抵の語はその原義的意味が解けるはずとなる考え方を示している}。

二重下線の 3 つの語 **Governor** の使い方には、英語で支配的な原理となる考え方の 1 つがよく見える。同じ **Governor** なのではあるが、最初のは素晴らしい一知事(a great Governor)、次は最良の知事(the best Governor)、そして最後は知事職(Governor)としてそれぞれ不定冠詞・定冠詞・無冠詞（筆者はしばしば便宜的に「 ϕ 冠詞」とも表記するが）となっている。名詞が可算名詞か不可算名詞かで末尾に s の有無とも関わるが、英語での基本となる考え方である。

この文中での ϕ 冠詞で s の有無で現れる下線中の名詞 borders, crime and lowering taxes にも注目されてよい。**crime** は加算と不加算が両用される。なお、この部分の lowering taxes（税金を軽減する）の言い方は Basic の範疇としてもよかろう。広義の Basic として Wider Basic（仮称）なるものを設定すれば、Basic の範疇か否か微妙でその境界線上にあるような word（語）や wording（文言）の便利な受け皿となると考える。

また、太線の語 **endorse** はやや堅い語ではあるが英語でよく用いられる。この語が仮に未知でも文脈推理でプラス(+)のイメージ語であることは推測されよう。**endorse** {en (= in) + dorse (= back)}であるが、接頭辞の en- だけからも意味は推理される。語の根本的な意味を理解するのに、接頭辞への注目は重要である。「証書などに裏書きすること」という原義から、「真に認める」のような意味となる。

② I have decided to terminate the planned Summit in Singapore on July 12th. While many things can happen and a great opportunity lies ahead potentially, I believe that this is a tremendous setback for North Korea and indeed a setback for the world ... (May 24, 2018)

▲（文末の破線は原文通り）。内容は前回の⑥などにつながる。6 月 12 日にシンガポールで開催することとなっていた史上初の米朝首脳会談(Summit)を Trump 大統領が、北朝鮮側に完全な非核化の意思がないとし中止と決めたというものである。米側は北朝鮮の「完全かつ検証可能で不可逆的な非核化」(CVID)を目指すとしている。会談中止は北朝鮮ばかりか世界にとっても大きな後退だと言っている（ただし、同時に一方で余地は残し、金正恩朝鮮労働党委員長に開催再考を促す趣旨の書簡を送った）。これは英文末尾に記したように現地時間 5 月 24 日のことである。

太線の Basic 語 **have** の root sense（原義）は前回すでに見たように、発生源としての印欧祖語の推定語根音形 PIE etymon /KAP/に由来し「獲物の頭を捕まえること」であるが、実は文中の太線語 **happen** と同系である。獲物の頭を捕らえることは「偶然の出来事」でもあった。**decide** はもちろん名詞の Basic 語 **decision** で考えればよいが、Basic 語 **scissors** などと同系で root sense は「切ること」である。語形から共通な意味は容易に察知される。

3 つ目の太線語 **terminate** が仮に未知の語でも英語からのカタカナ語「ターミナル」からも「終えること」の意味は推測される。未知の語もカタカナ英語（日本語）をあてがって考える手がある。どの語も大抵は意味を推し量るヒントとなるカタカナ語がある。これは未知の語の意味を推理する奥の手の 1 つである。なお、この最初の文は Basic では I have made the decision to give up the idea of having the Highest-level Meeting in Singapore on June 12th. などであり、実はそれぞれの例文をすべて Basic ならどう言うかを背景には意識もしているのであるが、紙面も要するし本連載で考える趣旨とも外れるので特にはここで扱わない。

次の文の文頭の太線語で Basic 語の **while** はやはり Basic 語の **quiet, quite** と同系、また un-Basic 語では **quit** (やめる) などとも同系であるが、文字からはこれらの結びつきが理解されにくいかもしれない。しかし音声からはそれぞれ [hwáil], [kwáiet], [kwáit], [kwit] であり、その結びつきも察知できてくる。これらの語は PIE etymon の /K^WEIə/ (K^WEI/) に由来するとされている。そうであればここでの共通の音素 /w/ の存在も納得できよう。原義はすべて「気持ちが解放され、ほっとして安定すること」である。**while** はそういう「解放され平穏な気持ちになる間(ま)のこと」のように考えればよからう〔これも同上拙著では第二部、例(134)で扱っている〕。

このあたりは一般の辞書ではもちろん把握できないし、ややレベルも高くはなる。しかしこういうものも慣れで徐々に勘も働くようになってくる。語の意味が根っから分かってくると語感が磨かれ真に身についてくる。早めに少し難しめのものにあたっておくと、それより難しくないものはその平易さが実感をもって味わえる。

opportunity は語根部に注目すれば Basic 語 **porter, transport, support, important, etc.**、プラス α Basic 語 **passport, import, export, etc.** の「運ぶこと」の原義から「機会、チャンス」の意味、また **potentially** は Basic 語 **possible, etc.** から類推で「可能性、潜在性」の意味は察知される。入門期を終えると必ず語彙力に悩む時期がくるが、要領よく英語語彙を把握していきたい。

believe は名詞の Basic 語 **belief** を知っていればよいが、実はこれはやはり Basic 語 **love, lift, level, etc.** と同系であるし、プラス α Basic 語 **delivery** と同系である。意味そのものは上で似た例を見たが「心が浮いて軽くなること」のような原義をもっている。**delivery** は Basic では「配達」の意味で用いるが、「分娩」の意味もある。何でも「負担が軽くなる」という語感がある。これもやや難しくはあっても克服できる難しさである〔この例も同上拙著、第二部、例(71)で触れている〕。

次の太線の語 **tremendous** はマイナス (－) のイメージ語であることは文脈から推理される。語根照合法〔これを筆者独自に etymon collation (EC 法) と呼んでいることは前回も言った〕で考える適当な Basic 語はさしあたっていないが、またもカタカナ英語 (日本語) をあてがってみれば「テロ」などが想起もされる。un-Basic 語の **terrorist, terror, tremble, tremor, etc.** はすべて同系語で、「怖くて震えること」が原義である。

最後の太線の語 **indeed** は Basic 語 **do** (実際に行動を起こすこと) と同系であるが、その原義からの類推で「实际的に、まさに」のような意味の副詞と感ずることは Basic 語ではないこの語が仮に未知であっても難はない。**tremendous, indeed** は共に強意語として、広義の **synonym** (同義語) ともなる。

なお、語釈とは別に、シンガポールでの米朝首脳会談は紆余曲折を経たが、結果的には中止ではなく、予定どおり 6 月 12 日に開催の運びとなった。